王文成

春風辭

明月辭

風狂文艸巻之一目録

一 春風辭
一 虛婦辭
一 飯古來辭
一 鼓鉦辭
一 逐蒼蠅辭
一 明月辭

風狂文艸巻之一目録 終

風狂文艸巻之一

浪速狂生　田中友水子撰

○辞類

春風辞

此辞擬漢武秋風辞

春風とは。なにたるものぞ。草木芽を出すく
るるふぜのぐむ。豊芳るの風ゆさぶりて。天乃そ月明
そひろこえ乃胡にいい。花の梢といふ。去年の候までも
艶をのぐして。雑費乃けるを和らぐ。若人の花艶の美
はまで。福徳乃いとまをれば。掃さらぬ例にいとる。
いでそよ唐櫛を。若さより候初て。菜子の寿りを。

醫者も者ぐ人し。茶碗も湯にかくまり。万代も寿乃
亀山を表とする。菫菜乃昆布椙単菊に任せ。
仙人は鼎をちぎり。恵麿に搗栗あつて。棋子門乃
わつまり。格泊茶いくにゆづり紫乃袁をとゞめ。枕
かたらぬ八千代の去を積かさね。神乃茶碗の数豊
饒乃叶ふ。祝い。神風や伊勢海老乃腰かゞむまで。子孫
乃栄を袁椙と櫃。ゆんらめで。祝い法も。大福
袁乃福くしさも因出くしやたゞ面白のうつぐ
年のほりもうとおかうつも。約年乃流りハ利
上をしても叶わど。蛮乃茶碗をお破て絵合せ。

乃ろに。そくしかれべし。人乃のお牡丹を如何と悔ん
ようそ。也宗乃去風にうそひて。豊彩乃袁ぐ毎紙
あくまで楽くまんのそ。

虚婦辞

此辞擬屈原が漁父辞

虚婦況にまゝ放れく。彩く川辺に吟み。艶乃
し顔を痩かゞあ。さに法く紅粉小茶ゐを集し米去
乃原も。怎れ乾まて名狂たし。せハ名小紅に椙さに
茶碗回て云。そりゞそれにあゝ冨袁の書たるとゞ。行ゝ故
ふ井とろ人果て彩に来れるぞや。虚婦ゞ云。我夫ハかく

もとより紀高陽なり。一あり乃ち人も皆碎を。亭に肉乃林に移じ。酒の池に添ぞ。移を飲てよろこび。後ハ飲れく楽を。美小武蔵野をたどりて。春の ゆうりかこち。行て言せず。更に去秋乃言を忘ぐ。我是紙いさしもとば。早く紀しして俗あ乃ちとをくば。乃男女仏なり。幸て西方浄土に行とも。亭精を乃春ふ事。八功徳乃水を。酒一ッを乃味に如ど。飲酒の戒も酒情乃訛言ふく。殊を也ば。忘不なしとて。遂りを破砕紙乃大人先生とハをわらる。我志ばくの孫紙用ひど。及くうとまも放れう。是ぞ回。碎あを物

に濡しぼよく。友と指移れ。茅にいうぐくも。酒飲ざうんかのこハ亮若くしく。玉乃を小尚を紀ん地ぞす。流ふれるを。上戸と下戸とハ移りをと云を絵くう。云乃花のなふ真じ。秋の月れおに移じ。去秋月一の群を花月ふう乃流に詠にも。酒をくんいうぐせまじ。花より陰をとハいうる下戸の行をうん。聽候ぞ候乃かも紀物にかるく却亭。怪くをんづをる吸物を水くうと誘を。情幸鰹鮮をうるさく言へくる。下戸の性相違し。飲おうくわ近くうんりめをそのぐ下戸の古先に。上戸をあるてる故に放れう。伝

でせめても。其糟を舐て。其醨を歠らさるそ。屈原
が云。狂人あのゝもうさく。世白が醉人。楽天が醉尹
乃美名を好らそ。拔茜組蛇之如仲乃乃国果人也。
別伯倫が女房こゝしかにあらんや。吾国欣ざる人り
四海乃豪たく。樽を抱にとる人そ。終日酒のおゝゝと。
安で身の醉くゝるをもんて。酒の狂くゝる伏欣んや。寧
候店にあをむひて死物をもとも。酒甕乃下に立じ。
篇完示と笑い。紅舷を敲を。乃ち歌ふて曰。滄浪乃
川風すゝ久れば。吾醉をさゆるべし。滄浪の水濁らば
着に雑魚をあらふべし。遂に去て復共に物いはず。

飯古来辞

此辞摸淵明飯去来辞

飯んぬ去来。世乃風俗を時勢によりて移りかゝる
亀乃川乃。流れくゝるまゝ水上を遡りて。石の上ふりゝ
上古を思ふに。人皆穴紙うちて蓋て居とし。籠嵐地嵐
と。相住にせゝ時代。爾乃人人乃住人。秩崩し給ふ。
や人代に乃んで。礼楽制度器をつり。宜敷乃民も。
おのもゝに蓋居して。ぐろもち地嵐と蹴蓋まちり
ゝ。頃時序代志乃大家乃禁錮も。茅茨
ふ紀の先を葺掃へば。茅本作乃真径たるに。清絶

をかけ紙を半たく。古堺三人の上に。此蒙流球の沙汰
ゆへなど。胡盆や木八九厚よ。俗後表の名沙ぶに形。
それより芳甲子にかあるん。東山乃風流ぼく。花車扮へ
より高情といい出。位冥利とと人。荏苒桑乃実柱
に。牡丹を乃れ。夏水仙を求め乃。ゆけさくさく浪よ
もろ。を江布の茅羽織を。四季形〳〵乃時をゆり。木芳
乃あさ紡を。佛候ゆ下の肱にいあるぼう。かたり付本絣
物さん。一布七十年古来ものたり。冥肱綾肱乃織如い。
乃乃用もそうとく。幸自〳〵ハ御義表々の俳のをたり。
それよりこのかど差く花笑になりて紡ゆ。古人への

系良の部乃脳帷子も。半袖のくをとそ紙いくらい。木ぶく
乃貨朴ちるい紙へ。清矣周防縮の一茶も。越後の
金巾にゆとろく。越後い紡縮乃貴きに氣ゆとれぬ時
勢よ。むろ稜つて。いさろとろ海人乙女まで。紅裏の色ぐ
ちぶ。ろ後の男も下帯乃紡物に。物好袖に洒落
にろ。彩紙さ角紙あるを貴之にろ。高ぶ竹乃風
情紙。いうぐ評〳〵ろ。英楊のおぐ乃。とろまみうん
とと結ん〳〵為。今文甲の光墨をあろろ。
紙の角にいたるとかあろさ角をろ結ぐ。箱後の樽乃。
光まみかんとと易ゆべ〳〵。ぐろ紙ぐろ乃沒

とゝのへ。加賀笠用せれわ五
の作やくしきに彩しひの如き也。笠半い書端と
化し。るト跡を笠て版下跡と変じ。金剛表鮮よ。表
面そ。紙ぐくしの作生ゆ。実も裏模れよ。白く出
しやせん。版んん去来ぶ。きしむうそ出ぐそといい
し。清お納言ぶむうしをいろかむうしをや去ん
きぐ。其むうを賀朴うて文花彩く。今うてそ文
うるを賀をうを文さきぶ。文花りめぐそれ
を。を平の作代ろ跡とるをが。出ぐそむうしも今の
ぐし。無くるを文道作をら十ら。四は彩りれ百物ちんぬ。

わく楽しひうれ。

鼓鉦辞

神を月の未をうと。本がくしうた彩く吹うそぐ。
胡の弟紙ふを去くれ。やれ衣あやくしうまとし。後紙と
おうをし。高知に念仏して。道路をうれ法師あり
を。ゆ。ゆ平ぶ彩猪に体ひ茶紙ろうをびうせう。
京ムくおぶ。行やん法ぶ。世にうをし氣に立
ゆんとうるぶ。ゆとして。其身のむうしを勾ぐ。
かにを言ぶ。況と元て書付あり。

蜀書に曰花一叶やうれ牡丹

その云ふもつくづくは坊も思ふにとみくらう。法師乃云。

ゆゝぬゝの紙くゝれたりうそぶ

紙くゝき金ゆえ故り。紙たるく。

金ゆあるゆゝ。紙いくゝぬ

を仇ゆゝを服をゆく大笑して。実あつまゆう。我としても

は坊とはゞ法事ゆう。魚を駕ゆく新ゆにも孤に純い

為掏りをかゝくゝ井ゝすゆゞ。ゆいにを狠耳婦く。

因果意故のゆ法を古めゆく。魚富天命乃論を。

理屈ゆに魚ゆゝ。ゆゝ孔紙ゆる人を去ゆて。月に

紙りゆゝに。黒糸の法に牡をんとゆのゝ。ゆ吹の紙と

見て小判をゆい。菜紫にむとぶ雷をゝ人ぶゆくゆや

まゆ。屁乃魚去の心を孔出て見れば。角もあゆ

んゆとて。

弱ゆは。さて金紙ゆ。ゆ。

金ゆゝぬ身と。ゆい。ゆゝば

法師の云。命をゆる云ふの心を。屁傍も孔出て見ゆ

べゝゝて。

弱ゆとて。さのゝ金銀。ゆ。ゆ。

金ゆゝぬ身と。ゆい。ゆゝば

をの云。富うれ。そ。十口のおうれを始し。貧をうのハ。
一身乃多きを一脇よとハ。四百四病乃ゆとゆ。貧病
に懲果しる人の行ゆう。命に安んじ。空腹をうして紛
捨べし。一生貪病にのうまも。凡旅にもくはあく待しは。
絶身乃楽地をもうどむ。ゆくゆく芸豆乃紅藍とたり。
江南万解の愁を消とる所あるまじ。貧富ともに。世紙
つる生業くさくされとも。其千要の所ハ。
結倉乃。ゆゆ多多多ゆ。
はまる所ハ。ゆうと一に
りうれ。天命ゆのまに飯し。鞦韆斗水を切る乃時

あるは。意法に鞦を奮ふべし。ゆまと大丈夫乃心をすゆ。
其はいうをう朔せん。ゆまを紙貧富に高下ゆれ。花月
乃ゆくに任ぜんとハ。はは師の云。いざゆ我を。茶糊の
実を物しまうんとして之帰れ。法を叫ゆ志て。
物さびしく。をのゆくに祈んうう。

逐蒼蠅辞

橋亭の主人蚤寐乃蒼を。蒼蠅の翼に散を覚され。
怒よりて。蠅を撲ゆ撲て曰。汝いうれは我蒼を破
乃ゆ。彼止牧の詩に。微々低制られしものハ誰にゆあうん。

神代にさえなりて恵まもしい汝がうまれ。汝乃書紙
しるし。食乃氣を亟。強憑をさめて。終日に書くしるあり
さ爲れとえんゆまど。袖より入る肌にせまり。書を穿ちて
いを写紙探り。不意亟に魚の宮をせ敷い。汝が居れ乃
門遠しいなるら。扨盃紙乃さ爲ましいなるら。元紙を踏り出る
さ。筆結をなむいるやいぶうくを。逐れて係ち敬して忘ち
裏紙。君敬に志ぶ。紙は。汝が性乃夢なるべし。されば孔子も
周公を貴ぶるよ。孟に莊るも蝴蝶と性ぶに由るかしん。王
衍を汝が社来には。塵尾を揮ふるをたゆく。清談乃邪
亡なるべし。門者に杖をあえ。文人に書紙棄させしも

汝が取乃なり。辯を勇者も敬しぐく。集りては仁者も
恵を稜を。孝り湯茶に溺を。香粘に苦む雅紙
せんうえどして。えさすに嘗くなる風情。手下に汝し
りし。沫にかうしきは。ちりく。俗ある紙。人用を恵ぶ
氣色更に乃く。恵まれ。ちりく風情乃人ざれは。書
にを恵まべき紙なし。改に減せられても恵まれ。盃空
ふを誘られ。恵まれの世にそびるるは。汝が謂をすべ。
恵日を愛まるは。俗乃恵を物に遠を取ちるべし。
嘗くしる蓋蝿。千里乃蹊尾り。託ば。遠に去る。至
寐せぬ図に行べし。たあらば世辞をいたむあとすべし。

明月辞

此辞轉東坡赤壁賦

甲子の秋の霜中月てんとしてそらよりふる三人より
いざなわれ。美酒はしゝの小舟をもよをして。南海の浦
に浪のうつるを。玉宮めぐ溝まろ枕にして。清しく
きゝ風徐ろに吹来る。よろこぶの乃初めに清しく
雲をそなへ清みなげく。東ゞ月を出やうに。明月の詩歌誦
せんにもあらず。窈窕の章を歌うんにも美人なくて
嗜欲の片ほとりに出わうしの後に小舟を敷してゆ
らゆらと彷徨あるくあるして。東の山乃端より月さし

のぼりさゝふ光は大空をそこなうの花にもかゝり雲。二
千里の水はてもなく清れ。をゝ結ぶる雲をは
月人結れしのあり。川岸を叩ふ月をば。茅乃宮毎ふ。
はゝ結べる乃香横ふ。水乃光景に接を。ゆれ彷
一紫乃糸をはなゞど。去住の風は任せれば。浩ゝとして
別乾坤ふ出るごとく。飄ゝとして月乃都に昇ぶ
ごゝ。月はかゝに小背候ふしる一太乃。ゆくゞ赤
出しあり。

月乃ゑば。酒の滅こそ。かゝしれ。
我身をちらぶ候にあり移ど

一人の友を引り誘め入るの
　後園にのせらるばよ紀境の形
梓さす男に酒のめとゝへば。下戸にて結ゞと辞退して
　月に串をさしらるばよ紀勝式
予。ゝとゝ一盃の酒を飲事能わざ。候連中に入べ
とゝへば。足下にを後言の話をあるべし。そやく
とゝゝの友に美ゝ行く足非ず。
　強ゝもに。あゝれとゝへ。月足酒。
　勝ゝゝ。ゝ。答物を形
と云拾。彼義の庵をゝゝあば。一瓢の酒を恵

ゝて。はゝゝゝど叫喚ゝて。帰ゝんといそぐ。予がゝ風
雅ゝとゝへばゝて。飲食の事ゝを楽ゝむゝを楽の
風雅ゝゝゝ。今青の月はさわあさ。花にゝる
を知ゝ。ゝあゝ。侠拾文料の氣色も。ゝ
んゝ。費伝ゞ綿地の杖いたゝゝ。真ゝゝゝ
をあゝひもば。侠拾郭ち義ゝ。今志ゝいて。
　侠拾や世の月を飲ゝゝ
とゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
実ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
いゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

万苦をなつまし。やく感じる事あつて。

世の中ハいろを月夜に。茶の飯。

負ぶ彷ぶ。ろくろ三人

くゝ眞ゝ。そゝくわゞに。月を尋ねる。月を西

り斜めなれば。鉄狠の雑を更紗けを被ゞ。今

ゝそハゝゝゝ帰れば。月のゝを初ゝ凄然ゝゝゞし。

風狂文艸巻之一終